

30P1-am008

帝京大学薬学部実務実習における小児科外来実習の有用性の評価

○齋藤 百枝美¹, 中島 康雄¹, 江戸 清人¹, 小佐野 博史¹, 栗原 順一¹,
渡邊 真知子¹, 山岡 桂子¹, 井上 圭三¹(¹帝京大薬)

【目的】帝京大学薬学部では、4週間実務実習において、2004年度より帝京大学医学部附属病院実習学生に対して小児科外来実習を実施している。今回、本実習過程において、学生が患者保護者と直接対面し、服薬に関するアンケート調査を行う実習内容を導入することにより、本実習の有用性を評価したので報告する。

【方法】対象は帝京大学医学部附属病院実習学生64名、6月～8月の3ヶ月間、小児科外来において、1回3～4名で行った。内容は午前中：オリエンテーション、小児科外来で指導者立会いの下患者保護者へ薬に関するアンケート調査、アンケートをした患児の診察と処置を見学、午後：担当した患児について発表、小児科における薬の使用の特殊性についてグループ討議、小児科の特徴・薬の使い方について補足講義とした。その後、学生に対して小児科外来実習についての6項目からなるアンケート調査を実施した。【結果】小児科外来実習の満足度については「大変満足」62.5%、「満足」37.5%、診察・処置の見学については、「とてもよい」64.1%、「よい」29.7%、「どちらともいえない」6.2%、患者へアンケートを行ったことについては、「とてもよい」64.1%、「よい」34.4%、「どちらともいえない」1.5%、アンケートをとることで患者の薬について困っていることを聞くことができたかについては、「はい」100%、小児科外来の実習が将来役に立つかについては、「とても役に立つ」62.5%、「役に立つ」35.9%、「どちらともいえない」1.6%であった。

【考察】今回実施された小児科外来実習は、保護者と良好なコミュニケーションをとることができ、学生の満足度も高かった。この結果は、保護者に対するアンケート調査の際に、事前学習で行った「医療面接 OSCE」の手法をそのまま用いることができたことが、良好な影響を及ぼしているのではないかと考えられた。